

「企業イメージ」雑感

西 村 晃

「〇〇会社はスマートだ」「××会社はドロ臭い」「△△会社は若々しい」「□□会社は古くさい」など私達の生活の中でこのような言葉を聞かされることがしばしばである。つまり、これらの言葉は企業の持つイメージではないだろうか。従って私達宣伝に携わる人間としてはこの何気なく口にされる言葉が非常に気になり、いかにして「良いイメージ」を持ってもらうかと苦勞するわけである。まず、「良いイメージ」とは何であるか。これは社会環境の変化、価値感の変化と共にその基準が変わるのは当然である。例えば「大きい」というイメージは、一九六〇年前半までは、「信頼」「安心」を意味する「良いイメージ」であったものが現在では必ずしも「良いイメージ」だけで存在しない。「独善」という極端な

連想を持つ人もいる。また、「進歩」というイメージは概して「幸せ」を目的とする動きを意味した。だが、「工業公害」「人間性無視」という短絡的なイメージすら生まれる昨今である。つまり人間生活中心の社会環境の中に於いて考えてみるとこの「良いイメージ」というのがなかなか難かしいものである。この様に「良いイメージ」についてはいろいろ意見もあるのが一般的に見ていざのイメージでもそれはその企業を取り巻く時代、社会環境の中で好意を持って受け入れられるイメージとするならば、さてそれを果たして簡単にその社会に植えつけることができるかと言えばその答えは当然「否」である。イメージの形成には期間（時には伝統に近い）が必要であり、そして種々の構成要因が、目的とする「良いイメ

ージ」に作動していなければならない。私は企業イメージは虚像でなく実像であり、実体であると思う。最近各企業がイメージを高める為にコーポレート・アイデンティ（CCI）であるとか、例えば社名ロゴの統一だとか盛んであり、それなりに重要なことであるが基本はトップ・マネージメントを中心とした企業の経営理念が消費者に目を向けた、また未来社会を洞察したものであることは必須の条件であり、これは当然の理である。そうした企業理念に基づいた商品の提供、商品の販売活動、宣伝活動などの企業のマーケティング諸活動を始め、企業の従業員の日常行動までが一貫したものであって初めて社会に受け入れられる「良い企業イメージ」が生まれるのであると思う。企業の理念が消費者中心の考え方があるのかかわらず提供する商品がメーカーの一人よがりの商品であったり、商品は理念を生かすものとして生まれているのかかわらず、宣伝広告でそれを充分に伝えていないとすれば、またそれを販売している人達の態度が消費者に不親切であったりすれば「良いイメージ」は生まれてこ

ないし、育たない。また時として企業が提供した商品が本来の目的でなく間違った方向で使用されるとすればこれも同時に「悪いイメージ」を企業に持たれることになる場合がある。おこがましい話ではあるが消費者教育の必要性が生まれてくるわけである。これがうまく(?)いかなないと、時にはその商品が人間の生活に必要なものであっても非常識ともいえる使用法によって商品の生命を絶つこともある。つまり、人間生活に必要なものを非常識な人によって消費されるのに不自由あるいは不幸な生活に人間を追いやることになる。いろいろと考えていくと「良いイメージ」の構築もなかなか複雑であり大変なことである。企業の内部要因と外部要因が、それぞれ個別に、或いは互いに影響されたりかみ合いながら作用しており、そして一つのイメージを形成するわけである。従って、「良いイメージ」を作り上げるのは一朝一夕ではできない。逆に「悪いイメージ」は簡単に生まれるものである。また前述の通り企業イメージは実体である以上、計算づくで「良いイメージ」が作れるものでもない。私共トヨタで

は交通安全キャンペーンを十年以上も続けているが、当時、モーターゼイションの伸長とともに交通事故が増加のきざしが見えた時私共は「一件でも交通事故をなくすことができれば」と願ってこのキャンペーンを始めた。これを企画した時、私共の故神谷名誉会長(当時社長)から「これによって企業イメージを上げることよりも、事故を一件でもなくすことを考えなさい。だから実際にできる範囲のことから始め、決して大型広告などを使用して表面だけを追う様なことのない様に」と厳しく注意を受けたことがある。つまり、トヨタの安全キャンペーン」を宣伝してもそれは本来の趣旨ではなく、キャンペーンの成果が挙がっていくうちに自然と主権の企業名が抜がるものであるということである。そして実体のもなった企業イメージが生まれることになのである。それだけにこのキャンペーンは決して中止する様なことのないキャンペーンである。世の中に全く交通事故がなくなつたとしてもこれは続けられるものであるし、続けなければならぬものである。

キャンペーンは商品(自動車)人間(運

転者、歩行者)環境の三本柱によって組立てられた。安全車の開発、運転者に対する安全運転を初め、事故の多い幼児、学童を対象とした安全教育、歩行者、自動車の通行区分の明確化、及び交通量制御などを考えた環境改善をもって進めたのであるが、最近では学童幼児達の交通事故も減少してきており非常に喜ばしい事である。また一方、企業のこうした活動はいつのまにか種々色々な方々からお声をかけていただけるまでになり、私共では唯一の企業キャンペーンに育ちつつある。今日に至るまでに全く私共の意としていることが判らずに痛烈な批判を公的な場所において与えられたこともあり、また逆に身にあまる有難い言葉を受けたこともある。しかしそのたびごとに商品の功罪を考え、キャンペーンの活動に反省を加え見直し、「私共は正しいことをしている」ということを信じながら続けてきたのである。この様な反省と実施はこれからも繰り返し続けていくつもりである。

(昭和二十八年大学経済学部卒
トヨタ自動車販売株式会社販売部長)

アルバイトの風景

西村 明

昨年夏、北海道北端の利尻島を訪れ、民宿を利用する機会を得た。夕食後宿側の依頼もあって若者達のコンパに加った。リーダーが手際よく進行の音頭をとったが、何とこれがない離島での歓待の演出は、生活の知恵とバイト学生のアイデアに負うものだという。

彼らのアイデアとエネルギーは、帰りの見送りに再現された。あちこちの民宿からバイト学生が船着場を集り、歌と踊りが始まった。手馴れたギターの伴奏、おそらくオリジナルの素朴でナウなリズム、コミカルな輪舞のうちに、鈴なりの小さな連絡船が離れ始めた。その感興が極に達した時、何と数人が海

に飛びこみ、いつまでも船を追いかけてきた。

船中の若い女性は涙をうかべて、手をふつて応えていたが、この型破りで若いアマチュアリズムによる見送りの光景は、今も焼きついて離れない。

これは学生の余暇とバイタリティーが、体験と実益を求め、こんな遠隔地までバイト進出が行われる一方、民宿側では、短い季節の稼ぎ時の臨時雇用として、学生達にその活力を依存するという需給法則が産み出した好例である。前置きが長くなったが、あの民宿でのバイト学生の心のうちに想像をめぐらしながら、アルバイトについて垣間見てみよ

う。
彼の場合利尻島民宿のバイトは僥倖だった。夏休みの旅行とバイトが融合した型で、友人から誘いがかかったのだ。往復旅費は先方持ちだし、期間はシーズンの前半、後半の選択にあてよう。バイトの後は北海道周遊旅行にあてよう。出発の前夜、多少の興奮に眠られぬまま、彼はアルバイトについて考えてみた。

何かで読んだが「高度成長が大学の進学率を高め、相対的に若年労働力の減少をもたらした、その穴埋めにアルバイト需要が高まった。また企業の機械化、合理化、システム化による単純作業分野の拡大、スーパー・外食産業・レジャー産業等の進出、景気変動に対する安全弁としての雇用対策等が、アルバイトを一時的、対症的な枠外労働から恒常的なシステム枠内に組み入れられることとなった。」なるほど、では自分達バイトをする側の事情はどうだろう。アルバイト経験のない友人を探すのに骨がおれる程、バイトは一般化している。仕送りに事を欠く場合は勿論、親に余裕があっても、遊ぶ金ぐらい自分で稼ぎたいし、その部分は干渉からも自由であり

たい。クラブ活動、コンパ、喫茶店、プレイガイド、それに旅行もしたい。スーツぐらい学生のたしなみだし、オーディオ、楽器、バイク、冷蔵庫、一通りは揃えたい。こうした人並みの学生生活を支えるには、バイトに頼るのが学生の常識で、何のわだかまりも、くったくもない。

故郷の親父の話だが、戦後の混乱期、彼の学生生活は、破れ畳の三帖一間、机代わりのミカン箱、冬は毛布をひっかぶって、専門書ととりくんだと言う。仕送りのない親父にはバイト収入が唯一、学業と生活を支える糧を意味した。

朝は日課のように学生相談所にアルバイトを求める学生の群れに混った。失業者が巷にあふれた時代で、バイトの口は彼らとの取合いであった。今ではほとんど姿を消した、行商、餅つき、ふすま張り、学校の宿直要員をはじめ、大掃除、引越し、配達等何でもやったが、背に腹が代えられない時は、国立病院で血を売ったこともある。余裕がある者が遊ぶためのバイトなど考えられもしなかった。最後は説教めいて「お前達は良い時代に生れた。親のふところを当てにしてレジャー

のためのアルバイトができる身分だから。学生は学業が本分、遊ぶためのバイト等ほどほどにしろ。」首痴で野球の下手な世代に生れた親父に同情もするが、むろん俺にも言い分がある。中学校から塾通い、受験一筋に詰めこみ勉強、大学入学でそんな生活から一挙に開放された気持も解ってほしい。卒業したら又管理社会にしばらくられるし、大学生活の間に食欲になんでもやってみたい。親父が良い時代に生れたというが、昔が悪過ぎたのではないか。現在は物質的、経済的には恵まれてるかも知れないが、肉面的、精神的な面で確としたものが求めがたい、そんな不安定な気持が、高度成長下のもとで造り出されたレジャー時代に、自分達を駆りたてるのかも知れない。

アルバイトは単に資金稼ぎだけのものではない。そこでの体験はそれなりの意味がある。体験労働といえは、除草剤反対運動から生まれた草刈十字軍や、北海道援農バイトがあるが、参加した友人が、とても辛くて逃げ出したかったが、やり遂げた充足感是他では味わえない、と誇らしげに言っていた。

バイト仲間には生活や学資のため深刻な者

も居る。危険な労働、苛酷な労働でもあえて賃金のいいのて手を出さざるを得ない者、親とけんかして仕送りをとめられ、アルサロへ飛びこんだ女子学生も居る。気楽にバイトをする者より彼等の方が学業とバイトの両立に気を配っているのには反省させられる。彼らを見ていると親父の言う「学生アルバイトの本質」に触れる思いがする。

高度成長下での物質生活の向上とくらばらに、モラルや肉面的なものの後退が指摘されているが、バイトを通じて、社会の断層で厳しく生きている人達が居ることをはじめ、生きた社会、世間の機微も解ってきた。

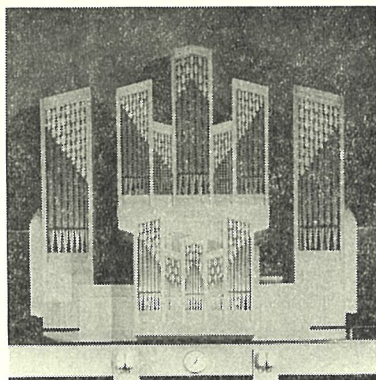
親父の言う程、今の世の中良いとも、俺達学生が気楽などとは到底思えない。……どうやら眠くなってきた。明日は北海道だ。

編集部から随筆風という依頼があり、字数の制約もあって断片的描写にとどまった。関連文献として、「アルバイト白書（アルバイトの意識と構造）——学生援護会発行」[IDE No.182, 1977. 9] 中一集出版、中央主教育協会発行」を紹介しておきたい。

（大学学生部厚生課長）

同志社女子部のパイプオルガンのついて

鴛 渕 紹 子

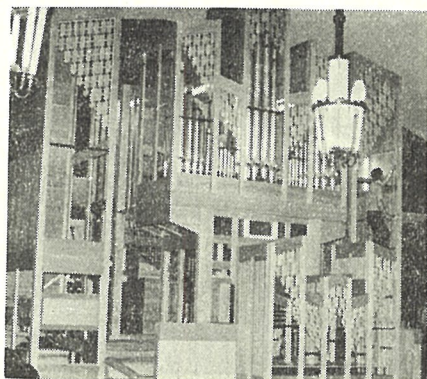


栄光館二代目パイプオルガン

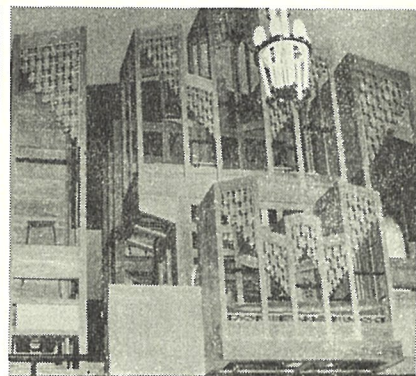
同志社女子部栄光館に、パイプオルガンがはじめて備えつけられたのは、一九四一年冬のことであった。この楽器は五十年以上にわたり、日本において、とくに同志社において、女子の教育のために生涯を捧げられた

M・F・デントン先生の在世中に、彼女の希望によって、米國太平洋婦人伝道会から贈られたものであった。今でこそ、日本にパイプオルガンは三百台余り設置されているが、一九四〇年代のはじめ、このような楽器はきわめて珍らしいものであった。米國モラー社製、二段手鍵盤と足鍵盤、二十六個のストップ（音栓）、一三二本のパイプをもつこのオルガンは、女子部の毎日の礼拝に、また全同志社の式典、宗教行事になくてはならないものとして、その柔かく美しいひびきを栄光館に充滿させてきた。私自身、はじめてパイプオルガンの音をきいたのは、この楽器の披露演奏会の時であり、当時、小学生であった私の耳に今もその時の美しいひびきが残っている。オルガンという楽器は、管理状態がよ

ければきわめて長い寿命をもつものである。しかし、一九四一年はまさに太平洋戦争開始の年であり、戦中、戦後の時期、学校としてもオルガンの管理どころではなかった。そのため、電線を巻いた布片がネズミにかじられてショートし、二つも三つも重なって音が鳴ったり、鳴らないパイプが出現したりし、正式なオルガン技術者皆無の長い期間に、原因不明、修理不能の故障が、時と共に増大していったのである。一九七八年一月、漸く同志社女子大学、女子中高では、日本楽器㈱にこの楽器の徹底修理の可能性を打診した。そして、修理には三千万円以上の費用がかかること、その上、修理後の保障は未知数との回答を得、新オルガン購入へと話は急速に進んでいった。そしてその時期に、たまたま来日中



パイプをみがいて並べる



外装部分組立て

であったカナダのカサバン社、西ドイツのクライス社の会社の人にも会い、この両者を合め、欧米数社に見積を依頼したのである。

パイプオルガンを購入するに際しては、①メーカーの選定（オルガンの種類、品質の選定）②価格 ③納期と設置の時期 ④設置場所など、多くの問題がある。記録にとどめる意味も兼ね、今回の新しいオルガン購入の過程を述べてみたい。

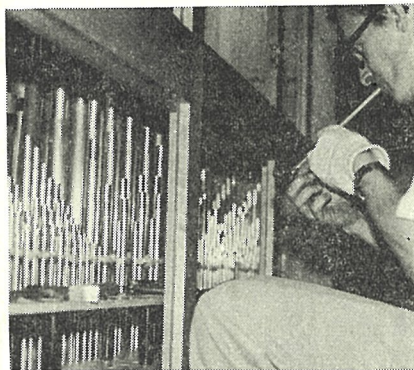
① メーカーの選定（種類・品質の選定）

パイプオルガンは、非常に長い歴史をもつ楽器である。その起源はギリシャ神話に出てくる『パンの笛』にまでさかのぼるといわれている。そしてB・C三世紀頃、エジプトのアレクサンドリアにいたクテシビオスの作った水オルガンが今日のオルガンの始まりであるという。オルガンが教会の楽器として典礼に使われていたことは、既に九〜十世紀頃の文献にみられる。オルガン曲を伴う楽器の歴史は十三世紀頃からはじまる。ルネッサンス時代からバロック時代のオルガン製造原理は非常にすぐれたものであり、最近ではこれを模倣して、多くの古典的な楽器がつくられている。十九世紀になると、オーケストラに合

まれる楽器の音色に似せたパイプをつくることがさかんになる。二十世紀の現在は、歴史的オルガンの模倣と同時に、一方では、集積回路やコンピュータによる記憶装置をもつ新しい楽器などもつくられている。オルガンの音色は、時代により、メーカーにより、国によって非常に異なる。同じフルート8呎の音色でも、ドイツとフランスのものでは大きな差異がある。そして、その発音原理はそれぞれの国の言語に大きく影響されているといわれている。長らく親しまれてきた栄光館の楽器はアメリカ製で、やわらかい音色をもつロマンチックオルガンであった。この音色とあまりかけはなれたものにならないようにということも、新しい楽器をえらぶ際の一つの条件であった。現在、日本に輸入されているオルガンの80〜90パーセントはドイツ製である。オルガン音楽史上、ドイツのオルガン曲の占める重要性を考えれば、新しいオルガンをドイツ製のものにしようとするのはたやすい。しかし同志社には、女子大学頌啓館と大学神学館に、小さいとはいえドイツ製の楽器が既に入っている。それにバッハ以後のフランスのオルガン音楽なども弾けるような楽器とい



音栓の作動状態をしらべるジール氏



パイプ調整中のシャンペン氏

うことで、今回はカナダ、カサバン社の楽器を選んだのである。カサバン社の創立者はフランス系カナダ人であり、フランスでオルガン制作を学び、フランス語圏カナダ地域にオルガン会社をつくった。現在も従業員90パーセントはフランス系カナダ人であり、会社内の日常会話はフランス語である。この会社は、ドイツのきわめて優秀な技術者が歴史的なオルガンの長所をとり入れることを強調して制作していたのが一九七〇年代のカサバン社であった。

② 価格

オルガンには規格品がない。注文を受け、設置場所に合わせて一台ごとに設計図を書き材料を揃える。パイプを巻き、木工作業をおこない、工場内で仮組立をし、音も一応整音した上で再び解体、梱包し、注文主に送り出される。そして現地で組立、整音、調整、完成となるのである。この制作期間、材料費、組立に関する諸作業の人件費すべてを総合するのであるからオルガンが高価なのは当然である。部品メーカーより材料を調達する手段もあるが、これではその会社の個性は出ない。カサバン社では送風機以外は、すべて自

社生産をおこなう。しかも固定価格で契約が出来ること、これらの点がカサバン社の楽器をえらんだ第二の理由である。

③ 設置時期と納期の問題について

オルガン設置に関しては、契約から完成まで、どんなに早くても一年半から二年はかかる。長い場合、三〜六年といわれる。学校としては納期三年以上は不可能である。又、毎日の礼拝、学校行事の関係から、組立時期はなるべく夏休みの二ヶ月が望ましい。これらの条件に関して、カサバン社は当初二十六ヶ月の納入期限を、完成するまで二十二ヶ月に短縮し、一九八〇年夏に組立が出来るよう配慮したのである。これはカサバン社が北米大陸第二の規模をもつ会社であったからこそ可能であった。ちなみにオルガン会社は、通常極小から小企業が多く、百人以上の従業員をもつところは、この世界では大会社なのである。

④ 設置場所

初代のオルガンは、講堂ステージの向って左側に演奏台があり、パイプはステージ正面の格子の奥に、押込んだ形で設置されていた。それは一九四〇年当時、既設の建物にオ

ルガンを設置する一つの方法としてとられた形であった。しかし、このためせっかくの音量は七割位しか講堂内にひびかなかった。オルガンは、本来、演奏台、送風装置、パイプ群を含めて一つの楽器として扱われるものである。その上、ステージの上では種々の行事がおこなわれ、ホコリがパイプの中にたまりやすいこともあり、二階正面に置くことを制作者側から提案された。これについてはいくつかの問題があった。演奏者の位置、椅子の撤去による数の減少、天井の高さなどの点である。欧米の教会では、オルガンが会衆席の二階後方にある例が多いが、学校においては、行事等の進行状況の把握上、前方にあることが望ましい。しかしこの点については、カガミをつけることで一応解決をみた。つぎに椅子のことであるが、女子中高としては、合同礼拝などのために、正面百席分の椅子を撤去することに難色を示されたが、止むを得ず補助椅子をつけることにした。更に天井の高さの問題であるが、講堂内部の改造は今回は考えないということで、16呎プリンシパルパイプを入れることを断念し、設置場所が二階正面に決定したのであった。

一九七八年十月末、正式契約をし、一九七九年夏には私自身 *St. Hyacinthe* (モントリオール市郊外) にあるカサバン社を訪問、最終的な打合わせをおこない、前述の過程を経たオルガンは、一九八〇年五月末、コンテナ一船でモントリオール港から積出された。太平洋・大西洋を越えて六月末東京港に到着、陸路、清水港に運ばれ通関業務を完了した。御承知の方も多いと思うが、一九七二年、頌啓館のオルガンは、神戸港まで到着しながら、はしげごと一夜の中に海中に沈むという事件があったため、まさかとは思いつながら今回、私は清水税関まで荷物の確認に行ったのである。十一トン積トラック二台とクレールン車につまれた百八十余りの荷物が、七月一日、同志社栄光館に到着、二日より組立がはじまった。カサバン社からの二人の技師、日本楽器のオルガン技術者、その他多くの人々の協力により、丸二ヶ月のちパイプオルガンは完成した。例年より涼しかったとはいえ、北国育ちのカナダ人技師にとって、むしろあつい京都での夏の仕事、扇風機の音も邪魔になるという消し、更には、けたたましく鳴くセミの声を避けるため窓を閉め切つての

整音作業はさぞ大変なことだったと思ひ、心から感謝しているものである。

新しいパイプオルガン カサバン No. 3455 は三段の手鍵盤と足鍵盤、三十六個の音栓、二五八三本のパイプをもっている。一番下の手鍵盤はポジティブとよばれ、そのパイプ群は、演奏者の後、会衆席につき出すように設置されている。真中の主鍵盤のパイプは、正面に美しく並べられ、第三鍵盤レシのパイプ群は客席からは見えない。ペダルパイプ群は、二つの塔にわけて並べられた。鍵盤と風箱の中のバルブを連結するキーアクションはメカニック式、そして、演奏台にあるストップつまみから風箱のスライダまでの連結システム、すなわちストップアクションは、エレクトロ・ニューマティック式で作られている。カナダオーケルの外装部分は、簡素な装飾をもつ。

オルガンは楽器である。楽器である以上、音が美しくなければならぬ。栄光館の二代目オルガンのまろやかな音色の中に、多くの人々が、安らぎと喜びを見出していただければ幸いである。

(女子大学教授)

デイヴィス著

『新島襄の生涯』の

挿入画について

大江直吉

一、同志社銅版画帳

学校法人同志社が、一九六五年十一月に発刊した「同志社銅版画帳」なる十四枚綴りの画帳がある。

此の画帳はたまた私が同志社を退職する折に、拝見をする機会を得たもので、創立当時の同志社の建物や、創立にかかわる事情を知る上で大切なので一部を頂いて大切に保存し、時折りは取り出して、眺めていたものであった。

銅版画の内容は次の十四の画である。

(一) 創立者、新島襄の肖像（明治二十年までのもの）

(二) 新島襄満二十一歳の時のもの（函館脱出前）

(三) アルフユース・ハーディー。

(四) 新島襄二十七歳の時、函館脱奔当時の扮装で撮影したもの。

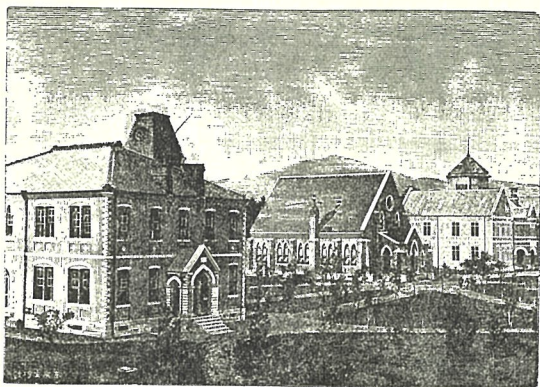
(五) 新島一家のもの。

(六) ワイルド・ローバー号（ハーディー氏所有の船で、上海からポストンまで新島の乗った帆船）

(七) 新島襄先生の書齋（新島旧邸にある）

(八) 三十番教室（豆腐屋であった廢屋を買収して、聖書教室として使用した建物）

(九) 明治十九年〜二十年頃の同志社の主要建物。



↑.....東京生巧館なる文字あり

(十) 明治二十四、五年頃の同志社風景（彰栄館、チャペル、理化学館など）

(十一) 理化学館（明治二十四年竣工した直後）

(十二) 有終館。

(十三) 彰栄館（明治十六年定礎）

(十四) 新島遺邸（寺町丸太町上ル、新島の住居）

以上の「銅版画帳」のあることは、案内知

られていないのではないかと思われる。これは当時、本部の庶務部長をしておられた、故田中良一氏の編集によるものと思ひ込んでいたが、後でよく聞き、調べてみると、田中良一氏の後任であった、生島吉造氏によって作成されたものであることが判った。

私がここで採り上げたいと思っていることは、此の画帳の画が、一見すると「銅版画」の如く見えるが、よく眺めて見ると「銅版画」ではなく「木版画」であること、また、此の木版画は、当時仏国に行つてその技術を修得して明治二十年に帰つて来た、合田清氏なる（後に東京美大の教授となつた）人によつて製作された「西洋木版画」であることを申したいためなのである。

二、「新島襄の生涯」の出版

同志社が昭和五十年に創立百周年を迎えるにあつて、同志社校友会では、百周年記念出版として「新島襄の生涯」を出版することになった。

此の書物は御承知の通り、新島先生の協力者、デイヴィス先生によつて著作されたもので、新島先生が明治二十三年一月二十九日に



Seikokan.....↑

昇天された同年十一月には、既に東京の丸善社書店を売却所として発刊されていたのである。そして此の書物は翌年、松村政春、村田勤両氏の訳によつて「新島襄先生伝」として警醒社から出版されている。

訳文中々明瞭、流麗で、その後、山本善越乃博士によつて、追補されて出版、更に今回文学部教授、北垣宗治氏によつて「新島襄の生涯」として口語体に翻訳され、校友会から出版することになったのである。

北垣訳は、初版からのものでなく、その後デイヴィス先生自身もその著述に若干の訂正加筆すべき点があることを気付かれたか、一八九四年に訂正して再版されている。そして、その後約一〇年を経た一九〇五年に第三版が出版され（再版と同じ版で）北垣訳は此の三版から今回翻訳されたものである。

さて挿入画の話であるが、たまたま私が校友会の事務理事として、此の出版を担当することになったので、多少研究する必要もあつて明治二十三年に出版されたデイヴィス先生著の初版を、女子大図書館から拝借して、手に取つて眺めて見ると、先に述べた「同志社銅版画帳」はこの初版が原本で作られた画帳であることが判った。また北垣訳は、明治三十八年の三版から訳されているので、今回の本には「神学館」（現在のクラーク記念館）と「墓地の新島先生の碑」の二枚が追加されているが、これ等は初版が出版された明治二十三年にはいづれもまだ建立されていなかったので挿入されていないのは当然の事である。

三、西洋木版画について

新島先生の伝記出版の仕事に携わる様になつて、此の挿入画を幾回となく眺めている中に、その線や、陰影が、銅版画による線でないことに気がき始めた。

そして、どうもこれは木版画的手法によつて製作された画ではないかと考える様になり、友人の一人に此の事を語つて、銅版画帖を見せたところ、全く同感との答を得たので

更に詳細に挿入画の一ツ一ツをよく調べてみると先にも書いた様に、陰影の部分、空や雲の描写、建物の屋根の稜線、又人物のバックの調子、先生の墓の碑の描き方、及びその背景の濃淡等々、銅版画の調子でなく、木版調であることが、判然として来た。

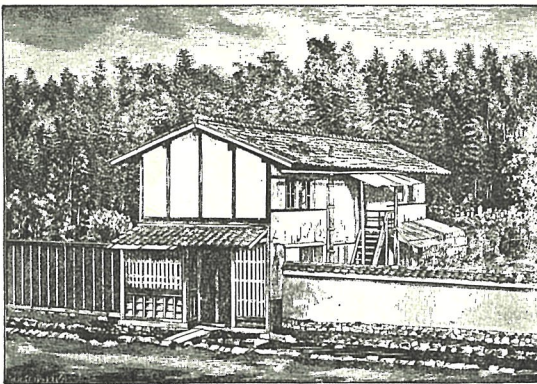
此の挿絵の右及び左隅に Seikokan 或は Tokio Seikokan 又は東京生巧館、等の文字が彫られている。これは此の絵を製作した会社、或は製作所の名称であつて、然もこれは明治二十一年に日本で始めて、西洋木版画を製作するために設立した会社名（木口木版）であることが判つて来た。

木版で製作するには大体二通りの方法がある。一つは有名なあの「浮世絵版画」が彫られている方法で、これは、普通、板目木版といわれている。板目木版とは、板にした板木の上に、薄紙に画がかれた絵を張りつけて鋭利な彫刻刀で、彫刻する方法で、日本の木版画は従来すべてこの方法によつて製作されて来たものである。

これに対して、西洋木版画（木口木版）は木を輪切りにして、つまり木の横断の面の芯の部分に彫刻する方法である。

板目木版より、材質的に、より一層堅いの、陰影などを作るには適している。従つて日本の木版画とは対照的な製作方法なのである。

此の西洋木版（木口木版）は先にも述べたが、日本の合田清なる人が仏国に留学中にその技術を修得して明治二十年帰国、同氏が中心となつて「生巧館」なる工房を東京の芝桜



↑Tokio Seikokan なる文字あり

日本郷町に造つて本格的な木口版画の（西洋版画）製作に取りかかったのである。

明治二十一年七月十五日に奥州の盤梯山が噴火した。東京朝日新聞社は、その噴火の様を「生巧館」で木口版画（西洋木版）にして、八月一日付の朝日新聞附録として配布したところ、世間から非常に珍らしがられ注目されることとなつた。

此の頃、東京朝日新聞社は、大阪本社より東京へ進出して来た時期であり、何か目新しい企画を考案する必要に迫られていた。

丁度次の年は干支では寅年にあたることから社長村上竜平所蔵「円山応挙の虎の図」を新聞紙一頁大にして、生巧館で製作、新年号の附録として、新聞購読者に配布したのである。これが亦評判となつて、希望者が殺到し、附録は増版に増版を重ねると云う好評ぶりを呈した。それは「虎の図」が応挙の絵の真を巧みに写し得た美事な出来栄であつたからであり、従来日本の木版画的手法とは全く異つた味を出したところに、世間の人気を勝ち取る原因があつたと言える。西洋木版画は時代の脚光を浴び、人々はその斬新さに驚いたのである。

當時は言うまでもなく、文明開化の時代で西洋文明を日本に採り入れ、日本化することに急な時代でもあり、日本の木版画になかった新鮮さが、一般世人の歓迎するところとなつたのであろう。

また「生巧館」なる名称も中々興味深い。

四、西洋木版画の採用について

従つて明治二十三年十一月に出版された、デイヴィス先生著の「新島襄伝」の挿入画は、当時非常に評判の高かつたこの「生巧館」に依頼して製作されたものである。

一見すると銅版画の如く見えはするが、銅版画でなく、木口版画（西洋木版）であり、当時としては、時代の先端を行く出版であつた。

デイヴィス先生は、この「新島襄伝」を執筆することに、並々ならぬ情熱を傾けられたことは、先生の伝記の終りの個所「吾々は新島襄から何を学ぶか」を読めば、ヒシヒシと感じられる。

明治二十三年に此の十四枚の挿入画を「生巧館」に依頼して製作させることは、当時にあつても相当な費用を要したに相違ない。当

時この西洋木版技術を採り入れて、挿入画とされたことは、デイヴィス先生の新島先生に對する深い尊敬と此の著作に對する高いほこりと、深い確信があつたと推測される。

その意味からも、此の初版「十四枚の挿入画については」私は深い関心を持たざるを得ないのである。それと併せて、此の本を出版された発行人は、上田周太郎氏である。此の人の往時の住所は、京都市上京区相国寺門前町志番戸とあるが、これは御承知の通り同志社のすぐそばである。上田氏は明治二十一年の同志社英学校英学普通科の卒業生（明治二十五年神学科本科も卒業）であるが、発行人となつておられることから、此の出版についてはデイヴィス先生との間に深いかわりあひを持つて居られたに相違ないと思われる。

従つて、上田周太郎氏の協力によつて此の伝記が出版されたとすれば、此の挿入画採用の理由や、その製作の交渉等についても深くタッチされていたのではなからうか。

私は、挿入画を「生巧館」に依頼されることになつた経緯や、上田氏が発行人となられた当時の模様、更にデイヴィス先生との関係等について、もう少し詳細に調べることは興味

深いことであり、また、此の本が出版された事情を知る上でも、非常に大切なことではないかと思うのである。併せてこの「挿入画」が「生巧館」に依頼して、出版の運びとなつたことは、当時としては、最新式の「ハイカラ」なことであつただけに深い関心を示すことは意味あることだと思ふ次第である。

（京都芸術短期大学学長）

